

令和 6 年 5 月 25 日現在

機関番号：34419

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00200

研究課題名（和文）植民地インド・セイロンの装飾壁画にみる民族主義の交流と対立

研究課題名（英文）Nationalism and Ethnic Conflict in Mural Art of British India and Ceylon

研究代表者

豊山 亜希（Toyoyama, Aki）

近畿大学・国際学部・准教授

研究者番号：40511671

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本課題においては、イギリス統治下にあった20世紀前半のインドとセイロン（現スリランカ）において、宗教建築と世俗建築ともにさかんに制作された装飾壁画の主題選択および様式的特徴の歴史の変遷を分析することにより、インドにおいてはヒンドゥー教、セイロンにおいては上座仏教というそれぞれの地域の多数派宗教の視覚表象が、制作当時に興隆した独立運動と結びついて政治的意味を強化していく過程を調査した。とりわけ、植民地経済の発展とともに社会的地位を上昇させた商人階級が施主となった建造物に着目し、政治性を帯びた装飾壁画が施主の政治運動への経済的支援と関連していることを実証的に解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、南アジアの二地域（インド、スリランカ）を比較対象として、植民地経験が国民文化としての視覚表象をどのように形成し、それぞれの地域の「国民」範疇における複数の民族の交流と対立が、芸術にどのように投影されているかを実証的に明らかにした点にある。いわゆる純粋芸術よりも社会景観の形成と密接に関わる商家建築の装飾壁画に焦点を当てて実地調査と文献調査を組み合わせることにより、従来の美術史研究では議論が不足していた、美術、政治、社会経済の相互関係の具体的理解につながり、また現在の国民国家における文化や伝統の起源の批判的理解につながった点において、本研究の社会的意義は大きいものとする。

研究成果の概要（英文）：This research project conducted a comparative study on mural paintings on both religious and domestic buildings in colonial India and Ceylon (now Sri Lanka), focusing on their subject matter and stylistic characteristics that implied religious nationalism in the respective regions - Hinduism in India and Theravada Buddhism in Ceylon. Particularly in the project, build heritage that were patronised by mercantile communities who rose their social status with great success in the colonial economic system was extensively researched to reveal interconnections of visual representations, politics, and socio economy in colonial South Asia. As a result, this four-year project revealed that religious nationalism and visual culture both in India and Ceylon were strengthened through mercantile patronisation for art and politics that was reflected in murals.

研究分野：インド美術史

キーワード：インド セイロン 商家建築 壁画 ナショナリズム 日本製タイル

1. 研究開始当初の背景

本研究を着想した経緯は、イギリス統治下のインドとセイロン(現スリランカ)双方において、植民地経済で財をなした商業階級が施主となってさかんに行われた、邸宅や宗教施設の建築事業に着目し、その地理的分布と様式的特徴の把握を目的とした基礎資料の作成を継続的に実施してきたことを端緒とする。研究対象としてきた建造物群の多くは地方に分布するため、都市部に移住した施主の子孫による保存管理の困難が長らく課題となってきたが、近年では文化遺産としての価値が高まり、社会的注目を集めつつある(図1)。一方で、観光資源としての活用事例が増加するのに伴い、こうした建造物群の初期造営時に用いられた室内外の空間装飾の諸要素が、現代的解釈によって取り払われるなどの課題も多数浮上している。とりわけ、空間装飾のなかでも施主の社会的地位や宗教的帰属の表明手段である装飾壁画と、公衆衛生観念の向上とともに近代化の象徴として用いられた装飾タイルは、建造物の観光資源化においてしばしば行われる空間構成の変更にあたり、いかにその価値を認識したうえで活用方法を決定するかが喫緊の課題となってきた。課題解決のためにはまず、初期造営時の特徴を文献資料との照合により可能な限り復元するとともに、現地調査を行って現状を把握する必要性が喚起されてきた。



(図1) 旧ビルラー邸 (19世紀後半造営)

植民地インドの商家建築の代表例

そこで、本研究課題に先立って 2017～2019 年度に実施した科学研究費(若手研究B)「植民地期インドの商家建築壁画にみる近代性と民族主義」においては、インド北部ラージャスターン州シェーカーワティー地方と、同国南部タミル・ナードゥ州チェッティナードゥ地方の二地域を研究対象に設定し、植民地期に当地出身の商業カーストによって造営された建造物の悉皆調査を行って集落内の地理的分布を把握したうえで、概略的な図面作成と写真記録の作成を実施し、造営年代順に収集したデータを整理して、その歴史的変遷を包括的に理解するための基礎資料を作成した。

本研究はこれをさらに発展させ、特に研究対象のうちインド南部のチェッティナードゥ州出身の商業集団であるチェッティヤールが、大英帝国の経済ネットワークのなかで積極的に移動し、インドと同様にイギリス支配下にあったセイロン(現スリランカ)、海峡植民地(現マレーシアのペナン、マラッカ、およびシンガポール)、さらにはフランス領だったサイゴン(現ホーチミン)などでも植民地経済における現地仲介商および金融商として活躍し、進出先社会と故郷の南インド双方において、その広域的な経済活動を反映する独自様式の建造物を多数造営していた点に着目したものである(図2)。その建築様式および装飾様式の展開には、出身地域で継承されてきたヒンドゥー教シヴァ派の宗教伝統と、進出先社会の文化との影響関係が推定され、また本国と進出先社会との政治的関係の悪化により、チェッティヤールとしての視覚表象である彼らの建造物群が進出先社会において忌避された可能性も指摘できる。そこで本研究では、チェッティヤールの出身地である南インドのタミル地方との関係が歴史的に最も長く、またタミル系住民と在地のシンハラ系住民の対立構造が植民地期を通して醸成されたとされるセイロンを研究対象として、チェッティヤールの建築とシンハラ系の富裕層が施主である邸宅や彼らの帰属する上座仏教の寺院建築の装飾様式を比較検討する研究計画を策定するにいたった。



(図2) チェッティヤールの貿易ネットワーク

2. 研究の目的

本研究においては、19世紀前半から南アジアおよび東南アジアの主要港に貿易商・金融業者として進出し、プランテーション開発や農産物取引など植民地経済に不可欠の存在となったチェッティヤールの建造物群を事例として、植民地経験にもとづく独特の折衷主義的でコスモポリタンな美意識がどのように形成されたのかを実証的に解明することを研究目的に定めた。具体的には、研究年度ごとにインド南部タミル地方に所在するチェッティヤールの故郷の集落に現存する建造物群の現地調査、スリランカのなかでもチェッティヤールが経済活動の拠点を置

いたコロンボの建造物群、そしてスリランカの多数派民族であるシンハラ人が信仰する上座仏教の寺院建築のうち、20世紀前半に改修や復興が行われた事例(図3)を抽出して実地調査を行い、それと併行して、研究対象である建造物群に関する植民地期の記録(写真、旅行記、政府の地誌調査記録など)を調査し、初期造営段階の状況、その後の歴史的变化、そして現状を把握する作業を進めることとした。



(図3) ヤタガララジャー寺院(20世紀前半)

植民地期に改修されたセイロン仏教寺院の代表例

これらの実地調査と文献調査を通して、研究対象時期にあたる20世紀前半のインドとセイロンにおいて、イギリスからの独立運動がそれぞれの多数派宗教を「イギリスの暴政から守るべき伝統文化」として位置付けながら展開されるなかで、ヒンドゥー教を主軸に据えたインドの独立運動と、上座仏教を主軸に据えたセイロンのナショナリズムが、建造物群を飾る壁画やその他の装飾要素にどのように投影されていたのかを明らかにし、これらの建造物群の造営を経済的に支えた富裕な商業集団が、その資金力をもって政治運動への支援も展開したことを踏まえつつ、視覚文化がいかに政治および社会経済を動かす役割を担ったかを実証的に解明することを最終目標として設定した。

3. 研究の方法

上述した本研究の全体計画は、前半の2年度間(2020~2021年度)は、新型コロナウイルスの世界的流行の影響により、外国での実地調査が不可能となったため、大きな変更を余儀なくされた。そこで日本国内で本研究に関して遂行可能な調査として、チェットイヤール建築にもシンハラ仏教建築にも共通して用いられている日本製の装飾タイルに着目し、その使用方法とそこに込められた文化的・社会的意義の考察を、日本国内で閲覧可能な資料分析から進めることとした。具体的には、国立国会図書館において20世紀前半(明治末~昭和戦前期)の日本国内におけるタイルの製造・貿易状況を統計データから包括的に把握したうえで、これらのタイルを所蔵するINAXライブミュージアム(愛知県常滑市)、多治見市モザイクタイルミュージアム(岐阜県多治見市)において現物資料の熟覧調査を行うとともに、この時期に日本国内でインドやセイロンへ輸出された装飾タイルの製造企業とその輸出を担った船舶会社の社史、タイル貿易に関わった在日インド人商人の活動を知る上で重要となる商工業者名鑑といった文献群を調査した。そのうえで、新型コロナウイルス以前に実施した調査記録から、チェットイヤール建築においては宗主国イギリスを規範とした壁面装飾にタイルが用いられており、植民地経済を通じたイギリスとの結びつきが建築様式からも見て取れるのに対して、シンハラ仏教建築においては、本来は壁面への施工が意図された装飾タイルを床に敷設しており、その背景として、イギリスへの抵抗の一環としての「土足禁止運動」の実践があることを明らかにした。

本研究の後半の2年度間は、新型コロナウイルスの流行が小康状態となり外国調査が再開可能となったものの、スリランカは国家財政の破綻に端を発する治安状況の不安定化が懸念されることから、渡航は実現できなかった。そのため、チェットイヤールの経済活動が展開されたセイロン以外の地域として、海峡植民地のなかでもシンガポールを対象を設定し直し、2022年夏期と2023年夏期にそれぞれ渡航して、チェットイヤールコミュニティによって造営された寺院建築の古写真と現状の照合、チェットイヤール商工会議所の植民地期の報告書、およびチェットイヤール寺院にかつては用いられ現在は文化財として政府管理下に入っている日本製タイルの調査を実施した。さらに、チェットイヤールと同様に大英帝国の貿易ネットワークが確立されたインド洋海域で経済活動を行ったインド出身の商人として、西部グジャラート地方出身の商業集団であるヒンドゥー教徒バティアイスラーム教徒ボホラの建造物群を本研究に先立つ科学研究費課題で予備的に調査していたことを踏まえて、その比較研究を新たに計画に含めることとし、その経済活動が展開されたアフリカ東部タンザニアのザンジバル島において、インド出身商人が施主となった建造物群の実地調査を行った。ここでもやはり日本製タイルの存在が確認でき、とりわけ現地のアラブ系王族の墓地装飾に用いられたのを規範とするイスラーム墓地へ利用を確認した。この事例からは、同じインド系でも宗教的帰属と進出先社会の文化様式との影響関係によって、異なる独自様式を発達させる状況を把握することができた。

4. 研究成果

4年間にわたる本研究の遂行にあたって当初計画からの変更は、本研究の発展的課題を見出すことができた点でいい結果をもたらしたと考えている。具体的には、研究の地理的範囲を当初予定していたインドとセイロンの二地域間関係から、チェットイヤールの広域ネットワーク全体へと拡大することにより、進出先各地のホスト社会との関係性とその建築装飾の混濁的性格へ

いかに投影されているのかをより詳しく明らかにできる可能性が明らかになったことである。さらに、とりわけ植民地インドの商業集団という研究対象を広げてみると、環インド洋海域にはチェットイヤールのほか、インド西部グジャラート地方出身のムスリム商人ボーラや、北部ラージャスターン地方出身のヒンドゥー商人マールワリーなど、「インド人商人」の内実は多様であったことは、これまでの研究でも認識してきた点であり、改めてその比較検討を本研究に組み込んだことにより、植民地インド出身者の多様なアイデンティティ表象のありかたを具体的に解明することができた。さらに、本研究の成果を踏まえた発展的課題を、科学研究費（国際共同研究強化（A））「植民地インドの広域経済圏における建築総称の国際比較分析」として提起し、さらなる研究の深化を図る状況を整えられたことも、本研究を遂行した大きな意義であったと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 豊山亜希	4. 巻 131
2. 論文標題 回顧と展望 南アジア（古代・中世）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 史学雑誌	6. 最初と最後の頁 287-291
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 豊山亜希	4. 巻 39
2. 論文標題 植民地インドにおける手仕事と博覧会の政治史	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 民族藝術学会誌 arts/	6. 最初と最後の頁 58-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Aki Toyoyama	4. 巻 27
2. 論文標題 Japanese Majolica Tiles in Colonial India	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of the Tiles & Architectural Ceramics Society	6. 最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 TOYOYAMA AKI	4. 巻 1
2. 論文標題 Visual Politics of Japanese Majolica Tiles in Colonial South Asia	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Journal of Indian and Asian Studies	6. 最初と最後の頁 2050010 ~ 2050010
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1142/S2717541320500102	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 TOYOYAMA AKI	4. 巻 7
2. 論文標題 Japanese Majolica Tiles in Colonial India	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of the Tiles and Architectural Ceramics Society	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Aki Toyoyama
2. 発表標題 Japanese Majolica Tiles in the Swadeshi Movement: Political Consumerism and Spatial Aesthetics in Interwar India
3. 学会等名 The 3rd International Conference on Indian Business and Economic History (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Aki Toyoyama
2. 発表標題 Fabricating Socio-Political Value of Indian Textiles in Colonial and Congress Exhibitions during the Mid-nineteenth and Early Twentieth Centuries
3. 学会等名 Navigating Commodities: Production, Markets, and Consumption in History (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 豊山亜希
2. 発表標題 植民地博覧会におけるインドの自己 / 他者表象とアジア観
3. 学会等名 人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業 グローバル地中海地域研究・環インド洋地域研究合同ワークショップ
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 豊山亜希
2. 発表標題 ナショナリズムを紡ぐ：インドにおける手仕事の政治史
3. 学会等名 民族藝術学会第38回大会シンポジウム「手仕事」とarts/：人類の創造的ないとなみを探る（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 豊山亜希
2. 発表標題 西デカンの小規模石窟集積にみる古代インドの仏教と社会経済
3. 学会等名 東アジアの宮都と宗教行事研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 豊山亜希
2. 発表標題 神と出会うために 礼拝儀礼布ピチュワーイー
3. 学会等名 みんなくウィークエンド・サロン（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 豊山亜希
2. 発表標題 「神様タイル」の誕生：戦間期の日印タイル貿易における宗教図像の商品化
3. 学会等名 日本南アジア学会第33回全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 豊山亜希
2. 発表標題 タイルになったインドの神様－金型でひも解く日印交流史－
3. 学会等名 受託記念企画展「金型の精緻・精巧美の世界」開催記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 三尾稔監修	4. 発行年 2023年
2. 出版社 国立民族学博物館	5. 総ページ数 199
3. 書名 交感する神と人：ヒンドゥー神像の世界	

1. 著者名 上羽陽子・金谷美和（編）、豊山亜希（分担執筆）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 132
3. 書名 躍動するインド世界の布	

1. 著者名 三尾稔（監修）、豊山亜希（分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 福岡アジア美術館、岡山市立オリエント博物館、古代オリエント博物館	5. 総ページ数 144
3. 書名 ヒンドゥーの神々の物語	

1. 著者名 三尾稔（編）、豊山亜希（分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 280
3. 書名 南アジアの新しい波 下巻	

1. 著者名 豊山亜希	4. 発行年 2020年
2. 出版社 多治見市モザイクタイルミュージアム	5. 総ページ数 32
3. 書名 金型の精緻・精巧美の世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究を基課題として採択された科学研究費（国際共同研究強化A）「植民地インドの広域経済圏における建築装飾の国際比較分析」の実施にあたり、シンガポール国立大学歴史学部准教授メーダー・マリク・クダイシャ氏と共同研究を進めている。クダイシャ氏は植民地インドの商業集団マールワリーに関する研究で知られ、研究代表者ともこれまで国際シンポジウムなどで意見交換を行うなど、研究交流を進めてきた。この共同研究においては、研究代表者がシンガポール国立大学を受入機関として1年度間にわたり渡航し、同大学図書館、シンガポール国立図書館、シンガポール国立公文書館において資料調査を行うとともに、現地にいまも現存する建造物群の実地調査を進める計画を策定し、2024年3月末から現地に滞在し研究計画を遂行中である。研究代表者はおもに建築装飾の様式的特徴の分析と、そこで用いられたタイルをはじめとする商品の来歴を明らかにすることを目標としており、クダイシャ氏はシンガポールにおけるインド系商業集団の活動記録に関する分析を担当し、定期的に研究協議の機会を設け、進捗状況を確認している段階である。国際共同研究強化Aの研究は、今回成果報告を提出する基課題の発展的研究としてその成果を英文単著にまとめることを構想している。シンガポールで共同研究を行うにあたっては、研究代表者自身の研究関心と実際の研究箇所を明確にしたうえで、これまでの成果発信内容を踏まえつつ、インド、マレーシア、ベトナム、スリランカ、さらには東アフリカ（スワヒリ地域）において現地調査を随時実施することにより、2024年末までに単著の原稿を完成させる予定である。また、単著の執筆に加えて、研究代表者の担当部分をシンガポール国立大学で11月に実施される南アジア国際研究コンソーシアムにおいて発表する予定が確定しているほか、クダイシャ氏と共同研究の成果を国際学会のパネルセッションで公表する方向で協議を進めている。

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

シンガポール	シンガポール国立大学			
--------	------------	--	--	--